

今日の福音書は、マリアさんが旅をして親戚のエリサベトのところに訪問した時の出来事を書いています。この出来事を教会は毎年5月31日に記念することになっています。アメリカやイギリスの祈祷書では、3月25日の聖マリヤへのみつけの日や8月15日の主の母聖マリヤ日と同様に、5月31日も大祝日にしています。しかし、なぜか日本聖公会は、聖書にハッキリ書かれている、この「おとめ聖マリヤの訪問」を小祝日にしてしまっています。聖書には出てこないマリアさんの逝去を記念した8月15日さえ大祝日にして守っているなら、妊娠2か月余りで親戚のエリサベトを訪問したことも大祝日として、アメリカやイギリスに倣い、もっと大切にすべきではないか、と私はずっと思っています。

この訪問が大切なのは、この訪問の時、エリサベトの歓迎の言葉に対して、マリアさんが歌った「マリヤの賛歌」、昔の祈祷書では「聖なるおとめマリヤの頌」と呼ばれる歌ができたからです。今日の福音書としては省いてもいいことになっている箇所ですが、私はここにイエス様の誕生の意味が隠されていて、クリスマス直前にも、特に強調して読まれるべきだと思うのです。そのことについて、今日は話しますが、その前に、この「おとめ聖マリヤの訪問」という出来事を、マリアさんの立場で少し考えておきたいと思います。

教会の伝統から言えば、ナザレに住むマリアさんに天使ガブリエルがみつけを持ってきたのが3月25日。そしてまる9か月過ぎた12月25日がイエス様の誕生ということになります。ユダヤでは、以前紹介したと思いますが、数え歌で9は妊婦の妊娠期間の月の数ということになっています。

それでエリサベトを訪問した時は妊娠2か月余りです。そしてマリヤの賛歌のあとにルカ1章56節には『マリアは、3か月ほどエリサベトのところに滞在してから、自分の家に帰った。』とあります。

教会はエリサベトの産む洗礼者ヨハネの誕生日を6月24日にしていますから、マリアはエリサベトの出産1ヶ月ほど前にエルサレムの西にあるエンカレム（ぶどう園の泉という意味）に住むザカリアとエリサベトの家に来て、出産前後のエリサベトの身の回りの世話をしたのでしょうか。そして訪問から3か月。8月下旬に自分の家に帰った、ということですが、それでは、マリアの帰った自分の家とはどこにあるのでしょうか？

普通に考えると、またナザレに帰り、人口調査のためにヨセフと一緒に出産直前にナザレから100キロ離れたベツレヘムまでロバに乗って旅をしたことになるでしょう。おそらく片道3日はかかる旅だったと思います。

しかし、私はこれについても、この10数年疑問に思っています。マリアさんがエリサベトを訪ねたことを記念して建てられた訪問教会は、エルサレムの西の方にあります。私はそこを18年前に初めて訪ねました。また、エルサレム市内にはアンナの教会という、マリアさんのお母さんの住んでいた家と思われるあたりに立派な教会が建っています。そしてマリアとヨセフの夫婦が登録に行ったベツレヘムは、エルサレムから南に8キロほどの場所です。だから、マリアさんは、エリサベトの出産の手伝いをすることで、妊娠が目立たないままでナザレからエルサレムの郊外に移れたのでナザレには帰らなかった。

ナザレでは、周囲の人々から白い目で見られるのを避けるように、天使が親戚のエリサベトの妊娠 6 か月であることを理由にナザレから去らせた。そして、妊娠 5 ヶ月で目立つようになると、そのままエルサレムにある、アンナの家。マリアさんの実家の家に帰ったということではないか。『マリアは 3 か月ほどエリサベトのところに滞在してから、自分の家に帰った。』とは、ナザレではなくエルサレムだったと思うのです。そして、クリスマス前にヨセフがナザレから来て、2 時間ほどで行けるベツレヘムまで登録のために出かけたと思うのです。それなら、周りの者も心配せずにベツレヘムまで行かせたと思います。

さて、それでは、マリヤの賛歌のほうに移りましょう。

この、革命的な歌を思い出してください。

◆マリアの賛歌

1:46 そこで、マリアは言った。

1:47 「わたしの魂は主をあがめ、／わたしの霊は救い主である神を喜びたたえます。

1:48 身分の低い、この主のはしためにも／目を留めてくださったからです。今から後、いつの世の人  
も／わたしを幸いな者と言うでしょう、

1:49 力ある方が、／わたしに偉大なことをなさいましたから。その御名は尊く、

1:50 その憐れみは代々に限りなく、／主を畏れる者に及びます。

1:51 主はその腕で力を振るい、／思い上がる者を打ち散らし、

1:52 権力ある者をその座から引き降ろし、／身分の低い者を高く上げ、

1:53 飢えた人を良い物で満たし、／富める者を空腹のまま追い返されます。

1:54 その僕イスラエルを受け入れて、／憐れみをお忘れになりません、

1:55 わたしたちの先祖におっしゃったとおり、／アブラハムとその子孫に対してとこしえに。」

身分の低い、この主のはしためにも、目を留めて、権力ある者をその座から引き降ろし、身分の低い者を高く上げ、飢えた人を良い物で満たし、富める者を空腹のまま追い返されます。

これは、イエス様の誕生の意味を語っている箇所、父なる神様の御心を語っている箇所だと思います。

そしてこれは、ベツレヘムで羊の群れの番をしていた羊飼いに天使が行った「恐れるな。わたしは、民全体に与えられる大きな喜びを告げる。今日ダビデの町で、あなたがたのために救い主がお生まれになった。この方こそ主メシアである」

世界のほんの一部、特権階級のためではなく、貧しい庶民のためにこそ、救い主が来たんだ、ということです。

私はこの 12 月という年末の季節には、ベートーヴェンの交響曲を聞くことにしています。数年前に手に入れた、クラウディオ・アバドという人が指揮をした、ベルリンフィルハーモニーのベートーヴェンの交響曲を 1 番から 9 番までの DVD を横で流しながら仕事をしています。

6年前、私の誕生日の翌日、11月26日でしたが、本屋さんに行くと、面白い本に出会いました。思想史研究者の片山杜秀という人が、11月20日に新しい本『ベートーヴェンを聴けば世界史がわかる』文春新書の1191番を出していました。

私は11月、毎日のようにベートーヴェンの交響曲を聴いていたのですが、それだけでは世界史を理解することはできないので、この本を買うことにしました。そして翌日は朝から晩までかかって、(途中で伝道部の仕事をしたり、鹿児島や福岡へのバスチケットを買いに行ったりしましたが)240ページほどの本を読むことができました。

この本で先ず学んだことは、音楽というのは、作曲家が勝手に音楽を作ればいい、というものではない、ということ。文学や美術であれば、芸術家はそれを作り、それを残しておけば、のちの時代に評価されることがあるでしょうが、音楽の場合は、作曲したものを演奏してくれる者や聞いてくれる「受け取り手」の存在が不可欠だということです。

そしてこの「受け取り手」は、時代によって大きく変わっていきます。クラシック音楽の主な舞台となるヨーロッパであれば、教会→王侯貴族→大都市の市民層と、受け取る側の主役は変わり、その移り変わり音楽は密接な関係にある、ということです。

記録に残っていて、現在もクラシックとして演奏されている古い音楽はグレゴリオ聖歌です。これは6世紀から7世紀にかけてローマ教皇の座に居たグレゴリオ一世の編纂による、という伝承ですが、実際には9世紀以降につくられたものだと見られています。これには楽器の伴奏はなく、またこれは礼拝に来た信徒に聴かせるのではなく、神様にささげる、メロディのついた祈りというのが適切な表現でしょう。中世においては教会が絶対的な権威を持っていて、歌手も受け取り手の聴衆も、聖職者や修道士たちでした。教会だけの音楽だったと言えるでしょう。

しかし、十字軍の失敗で教会の権威が揺らぎます。またルネッサンス、宗教改革などの出来事を通して教会やヨーロッパ社会をとりまく環境が変わってきます。特に画期的だったのは、ルターによる宗教改革でしょう。それまで、教会の聖歌や礼拝式文は、聖職者にしかわからない、古いラテン語を使っていました。読まれる聖書も、ヒエロニムスがギリシャ語やヘブライ語から訳したラテン語聖書で、最初は民衆にもわかる言葉だったけれど、人々がイタリア語などを話すようになって、聖書はずっとラテン語でした。

それをルターがドイツ語に訳し、教会での聖歌も、民衆が歌いやすいドイツ語の讃美歌を作曲したのでした。それに呼応して、教会の聖職者だけの音楽から、王侯貴族が世俗の音楽を楽しむようになったが、まだお金と教養のある人たちだけのものだった。ところが、フランス革命など庶民の権力闘争が展開されている時に、作曲家は、受け取り手に合わせるように努力した。

その点、ベートーヴェンは最初から革命の中で育ち、権力者には決して頭を下げないところがあって、それが彼の交響曲などに反映されている、というのです。

ベートーヴェンの音楽の特色を片山さんは3つあげています。①わかりやすくしようとする。②うるさくしようとする。③新（あたら）しがる。

ベートーヴェンの交響曲には、名前がよくついでいますが、一番代表的なのは5番『運命』。最初の『ジャジャジャジャー』というのが、何度も繰り返されるので、子どももすぐ覚えてわかりやすい。①

そして、貴族たちが楽しむような室内楽の小規模で静かな音楽とは違い、大都会の民衆が集まるコンサート会場では、大きな音で聴衆を圧倒するということです。これで強い印象を与えます。②

そしてそれは、常に新しい刺激を求めている民衆に、新しいメッセージがないといけません。③

そうした中で、ベートーヴェンの交響曲9番合唱付きは、それまでの伝統を破って、わかりやすく、大勢の人々が簡単に口ずさめるものになっています。

第1楽章から第3楽章までは、テクニックを駆使した上級者向きの音楽が展開していますが、第4楽章に入ると、突然、「おお友よ、この音ではない！」と歌いだして、あの「歓喜の歌」のメロディが始まるのです。

ベートーヴェンは、音楽を一部の特権階級だけのものにせず、市民層全体に音楽を広げた、近代市民という新しい聴衆のニーズに応えたということが、大きい。彼の持つ玄人好みの高度な音楽ということだけでなく、それと共に世のすべての人々に音楽を普及させていったことが大きい。

それは、ルターが聖書を一部の聖職者のものだけにしていたのを自分の国の言語に翻訳し、自分の国の言葉で讃美歌を作った宗教改革の精神を引き継ぐものとなったのです。

イエス様の誕生が、単にクリスチャンとか、一部の裕福な者のためではなく、すべての人の救いのためであったということを、私たちは聖書の翻訳や、作曲家の作風からも感じ取っていききたいし、私たちの信仰が、すべての人の幸福につながることを目指している、ということをお忘れなさいと思います。

（今年の降臨節第4主日には、クリスマス礼拝をするので、この説教は使いませんが、クリスマス礼拝などで、一部話そうと思っています。）